

名 称	合志市ボランティアセンター
所 在 地	〒861-1102 熊本県合志市須屋2251-1 合志市社会福祉協議会内
連 絡 先	TEL : 096-242-7000 FAX : 096-242-6635 URL : http://www.koshi-shakyo.or.jp/

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 合志市 53,450人(平成19年3月末現在)

合志市は、県都熊本市の北東部に位置し、平成18年2月に合志町、西合志町の2町が合併し生まれた新しい市である。総面積は53.17㎢（東西約12km、南北約8km）である。

北部地域は阿蘇の火山灰が降り積んだ黒ボクと呼ばれる火山灰性腐植土に覆われた広大な農地が広がり、県内有数の穀倉地帯となっている。

住宅地と商業地は、以前から国道・県道や熊本電鉄沿線に形成され、熊本市に隣接した南西部一帯に新市街地を形成している。

事業の名称、活動概要

名称 総合的な学習の時間の支援（福祉擬似体験）

<事業内容>

管内の小中学校の「総合的な学習」に対する支援及びコーディネートを行う。

<学校の提示した目的>

地域学習（共に自分らしく生きる）の一環として、合志市社会福祉協議会の協力を得て、福祉擬似体験を実施することで、福祉を自分の身近なこととしてとらえ、新たに何かを感じとり、自分を伸ばすきっかけとする。

<体験内容>

車椅子体験学習

視覚障害体験学習

音声訳体験学習

高齢者体験学習

事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

平成14年度より始まった「総合的な学習」の時間により管内各学校で様々な福祉教育・体験学習の支援要請が以前に増して多くなった。合志市ボランティアセンターである合志市社会福祉協議会（以下「当社協」）では、異世代交流や福祉・ボランティア体験等を日ごろから行い、また各小中学校が独自に福祉活動が出来るようにボランティア協力校（福祉協力校）として指定していたため日ごろから福祉活動に関する質問や相談が学校から寄せられ、また当社協からもボランティア活動の依頼など行っていたため、「総合的な学習」の時間が開始されても、改まることなく当社協への支援依頼はごく自然に行われた。

本件については学校側より車椅子・視覚障害体験・高齢者体験・音声訳体験とメニューの指定がなされ、学校側の希望に沿う形で調整を行った。指導に当たっては福祉擬似体験を通じて行う学習形態であったため、一定の専門性のあるスタッフが必要と判断し、視覚障害体験・高齢者体験については当社協職員の中から現業の職員及び有資格者を中心に配置し、音声訳体験は実際にボランティアで音声訳活動を行っているグループに協力を依頼した。

事業の内容

① 事前準備として行った取組（企画段階）

○学校との打ち合わせ

例年行っている事業ではあるが、毎年学校側の担当者が変わるため事前に打ち合わせを行った。検討事項としては、日時・内容・場所・準備物の4点について主に行った。日時については当初学校の指定する日程では、スタッフの確保が困難であったため、調整を行い日程変更しての実施となった。具体的には3年生7クラス（248名）が対象となり一度での受入れは困難であったため、二日間に分けて実施することにした。

○音声訳ボランティアとの打ち合わせ

中学生の体験内容として適当なプログラム作成を依頼した。具体的には、一グループ当たりの体験時間が一人当たり約5分程度と少なく、スムーズな体験が出来るようにするためには、生徒に対して事前に音声訳の課題を出して予習（練習）をする必要があるとの意見が出され、学校の担当者には、課題については必ず予習をするように依頼した。

② 活動の展開内容（活動段階）

○当日のプログラム

- 14：00 生徒集合・開会式
- 14：15 体験活動（90分）
- 15：45 閉会式
- 16：00 教室へ移動

16:10 各教室にて感想記入

○各体験活動の概要（生徒一人当たり1種の体験で行った）

◇車椅子体験学習（述べ70名参加）

車椅子の介助方法・体験乗車しての被介護者体験

◇視覚障害体験学習（述べ70名参加）

視覚障害者の介助方法・アイマスクや白杖を使った被介護者の体験

◇音声訳体験学習（述べ42名参加）

視覚障害者向けに、カセットテープに広報誌を録音する体験

◇高齢者体験学習（述べ66名参加）

加齢による心身状況の変化についての学習・専用の擬似体験ツール使用した高齢者体験

授業の一環として、体験を通して学ぶ3年生全生徒が対象の事業であった。男子生徒の中には真剣に取り組めない生徒もあり、思春期の世代には、このような模擬的な体験活動に真面目に取り組むことは「かっこ悪いこと」「恥ずかしいこと」認識される傾向があるのか、対応に苦慮する場面もあった。それでも体験している生徒自身はそれなりに考えながら体験をしている様子であった。

③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

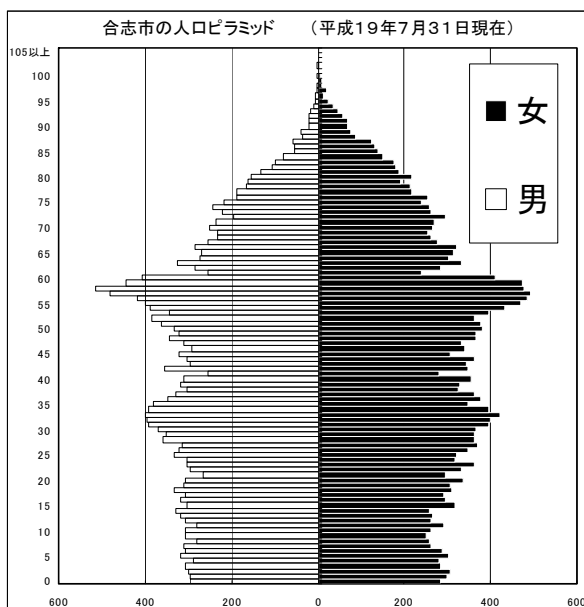
事業を実施するに当たって調整を進める中、学校（依頼者）・当社協（支援センター）・ボランティア（協力機関）の持つ「伝えたいこと」にずれがあることが分かった。依頼者の求める内容に沿う活動の展開はもちろん重要であることに違いないが、支援センターがコーディネートする場合には、依頼者の話をうのみにするのではなく、相当に検討・協議した上で内容の修正を求めることも時には必要でないのか。そのためにも依頼者の“目的を明確”にした上で“要求される支援メニューが本当に有効であるか”、対象者にとって“有効な手段”であるかを検討しなければならない。また協力機関に対しても活動の内容よりも目的を重視して説明した方が対象者にとってより良い活動ができるように思われる。支援センターとしては、総合的にコーディネートする上からも日頃から学校等と各施設との連携を密に取り、常に指導のできる人材の発掘やニーズに対して的確な対処ができるような情報の収集など地域にアンテナを張っておく必要がある。

事業の成果と今後の課題

今回は約250名の生徒を対象に4時間程度の体験活動を行ったことよりも、対象となった中学生にこちらの意図がきちんと伝わったかの疑問がある。後日、学校より頂いた生徒の感想文を読んで、実際そうであったのであろうか？本件は、日時・場所・対象者数ありきの計画であったため、学校の希望する活動内容に対して当社協の考える（伝えたい）

内容にずれが生じたのも事実である。中間支援を行う体験活動ボランティア活動支援センターとしては受身でこたえるのではなく、今後は学校側と施設が十分に協議を重ねる時間を確保し、指導に当たって、職員依存のスタッフ体制ではなく、必要に応じて専門性の高いボランティアを養成しスタッフとして起用していく方法が求められる。また、事後学習も大切にしたい。この種の事業は一度限りの短期活動としてとらえるのではなく、長期的に捉えれば生徒のアフターフォローがもっと十分にできたのではないかと思う。

青少年期までの体験活動・福祉体験は、次世代を担う彼ら対し、我々大人が必要なことを正しく伝えていく必要があると言え「福祉＝何らかの支援を必要とする人」といった認識ではなく「福祉＝共生の社会」とし、その為の一手段として「体験による技術・知識の習得」であることを伝えていく必要がある。そのためにも、体験だけの活動ではなく、心に響くような活動となるようにしていきたい。



合志市(平成19年7月31日現在)	
人口	53,730人
男	25,876人
女	27,854人
世帯数	19,542世帯
年少人口	8,700人 (16.2%)
生産年齢人口	35,022人 (65.2%)
65歳以上	10,008人 (18.6%)



視覚障害体験



車椅子体験



高齢者体験

執筆者職・氏名： 合志市社会福祉協議会 総務課地域福祉係
ボランティアコーディネーター 平川 貴光

コーディネーターからの一言コメント

学校の授業に地域の人々や団体に関わる際に、学校との連絡調整が何にも増して重要であり、コーディネーターの力量が問われ、この事例はコーディネーションの成功事例である。コーディネーターの活躍に期待したい。

(木村 清一)